

咳をしても一人

校 長 武井 正明

孤高の自由律俳人、尾崎放哉のあまりにも有名な句である。

先日の研修会後、高松から小豆島に渡った。

この美しい瀬戸内海に浮かぶ、大小様々な小島の向こうにある「二十四の瞳」の舞台となった、オリーブでも有名な小豆島に行ってみたくなった。

私からしてみれば、佐渡には、そう気軽に行けない。この高松港というのは高松駅からすぐ近くで、電車に乗り継ぐような気分で、気軽に乗船できる。往復 2660 円、片道 35 分で行けるとわかったら、もう迷うことはなかった。

島は車も人も、まばらだった。高松よりも潮の香りが濃い感じがする。小舟が横付けになった静かで小さな港町。ふと、こんな所にずっと生活している自分を想像してみる。

どこへ行くともなく歩いていると「尾崎放哉記念館」の表示が目に残る。

ん？尾崎放哉って小豆島の人だったっけ。

吸い寄せられるように歩を進めると、曲がりくねった小道の奥に、ひっそりと慎ましくそれはあった。入館料 220 円。貧困で苦しんだ、放哉らしい佇まいである。

入ると女性の学芸員さんがひとり。そこからは私の質問攻めに遭うことになる。

放哉は亡くなる 8 カ月間をここですごした。既に肺結核を患っており、師匠の萩原井泉水に京都での療養を薦められるが固辞した。穏やかで眺めのいい、この小豆島を「終の棲家」とし、放哉は俳句三昧の生活を送り、42 歳で終焉を迎えるまで約 2700 句を作った。

「咳をしても一人」はその頃の句。「分け入っても分け入っても青い山」の種田山頭火とは、直接会うことはなかったが、酒と人間関係での失敗や、同じ自由律俳句の名手として共通点も多く、お互いを認め合う関係だったという。

記念館を出て左手に墓地がある。一番奥の高台に、放哉の小さなお墓があった。

ワンカップ酒 2 つと煙草が供えられてあった。

放哉さん、新潟から来ました。偶然お会いできて光栄です。

手を合わせ、振り返ると、どこまでも穏やかな小豆島の自然があった。こんなに良いところだけれど、私は放哉のように孤独に耐えることはできないな。

僅か 2 時間弱の小豆島だったが、忘れられない「尾崎放哉の小豆島」となりました。